

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。まずは、東日本大震災で被災された方々に哀悼の意を表するとともに、一日でも早い復興をお祈り申し上げます。

さて、研伸館に行く途中見えていた万博公園の満開の桜も散り、新緑の季節になってきました。この「東大日本史のみかた」も3年目に入りました。今年も最新の東大の入試問題を題材にお話をしていきたいと思っています。

今回の問題は「白村江の戦いとその後の情勢」に関する問題でした。672年に起きた白村江の戦いは、律令国家の成立期における大事件ということもあって、外交史の観点からも政治史の観点からも何度か東大の問題で題材にされています。

1992年〔1〕7世紀、日本が百済を支援した背景
1999年〔1〕7世紀後半の戸籍作成の進展と
律令国家の軍事体制の特色

1992年の出題では白村江の戦いにおいて日本が百済を支援した背景を「国際的環境と国内的事情」に焦点を当てて解答するもので、一方1999年の出題は律令国家の軍事制度の形成過程において「天武の個人的経験を越えた古代の国際的経験（≡白村江の戦い）」がどのような影響を与えたのかというものでした。いずれも、白村江の戦いの経過にとどまらず、国内の律令国家形成にどのような影響を与えたのがテーマになっていました。そして、今回の問題も同じく、白村江の戦いの律令国家形成への影響が問われるものでした。

このように同様のテーマが数度出題されていることから、今回のテーマが東大入試において重視されるテーマのひとつであるということができます。ですので、今回は問題の解説にとどまらず、広くこのテーマをみていきたいと思います。それでは解説を始めていきましょう。

<白村江の戦いの軍勢の構成>

設問

A 白村江の戦いに倭から派遣された軍勢の構成について、1行以内で述べなさい。

白村江の戦いの経過（日本が百済再興のために白村江に軍勢を派遣し惨敗した）については、みなさんよく知っているところですが、この問題のようにその「軍勢の構成」は？とよめられると、教科書にも記述の無いところですので、知識では解けません。

そこで、いつものように資料文を頼りに解答の作成を進めていきましょう。設問Aに関係のある資料文は、(4)と(5)ですね。

(4) 百済救援の戦いに動員された筑紫国の兵士
おおともべはかま大伴部博麻は、ともに唐軍に捕えられた豪族の筑紫君ら4人を帰国させるために自らの身を売った。博麻が新羅使に送られて帰国できたのは、690年のことであった。

まず「豪族」については「筑紫君ら」とあり「君姓をもっていることから、郡司の先祖、つまり国造（もしくは旧国造）と判断できます」。一方で「筑紫国の兵士^{おおともべはかま}大伴部博麻」に関しては、「唐軍に捕えられた豪族の筑紫君ら4人を帰国させるために自らの身を売った」とあります。ここから「豪族」と「兵士」の関係を推論しなければなりません。時代劇なら、主君のために自らを犠牲にしたといった類の美談となるところでしょうが、この時代においてほぼ強制的に徴発されたであろう兵士が、自ら進んで犠牲になったとは到底考えられません。よって「豪族」と「兵士」の関係は「豪族」が「兵士」を支配し、「兵士」の人格を「豪族」が自由に左右できる状況にあったと考えられます。それにしても、「兵士」の身になると…つらいですね。

強者の戦略

(5) 『日本霊異記』によれば、備後国三谷郡司の先祖は、百済救援の戦いに赴いて無事に帰国したのち、連れ帰った百済人僧侶の力を借りて、出征前の誓いどおり、郷里に立派な寺院を建立したという。この寺院は、発掘調査された寺町廃寺である。伊予国の郡司の先祖についても、同様の話が伝わる。

資料文(5)では、「備後国三谷郡司の先祖」「伊予国の郡司の先祖」が百済救援の戦い(≡白村江の戦い)に赴いたことが記載されています。そして、ここでは「郡司の先祖」という表記から旧国造層の豪族が軍勢の構成要素であったことがわかります。ただ、それであれば資料文(4)だけでも十分読み取れる内容ですので、資料文(5)の必要性がなくなってしまいます。東大の問題において意味のない問題文・資料文はひとつもありますから、ここでは、資料文(5)の「備後国」(＝中国地方)、「伊予国」(＝四国地方)に注目して、軍勢の動員範囲が「筑紫」(＝九州地方)をあわせて広く西国に及んでいたことを読み取りましょう。以上をまとめます。

【設問A 解答例】

西国の旧国造層の豪族とその支配下にある人々で構成された。(28字)

これで設問Aの解答は完成ですが、白村江の戦いの軍勢の構成に関して、東京大学の教授でもある佐藤信氏の『日本の古代』に、以下のような記述があるので紹介しておきます。

白村江の戦いには九州ばかりでなく、東北地方に至るまでの多くの地方豪族が配下の軍勢を率いて参戦しており、敗戦によって、日本列島の国際的危機と国家的集中の必要性とを多くの地方

豪族たちが認識したことは、その後の中央集権的な国家体制の形成に向けて大きな力となっていた。

設問Aでは資料文の情報から軍勢が構成された地域を「西国」としましたが、**実際には東北地方に及ぶ広い範囲から徴発されていたようです**(『日本書紀』には百済再興のための軍勢として、「上毛野君」(＝東国に根拠地をもつ国造層の豪族)、「庵原君」(＝駿河国庵原郡に根拠地をもつ国造層の豪族)の記述があり、また『続日本紀』には唐に捕らえられ、707年に帰国した人物として「陸奥国信太郡生王五百足」の記述がみえます)。

そして、その広い範囲の地方豪族とその配下が百済救援の戦いに参加したからこそ「**日本列島の国際的危機と国家的集中の必要性**」、つまり白村江の敗戦後の日本の防衛策の実行と律令国家の形成が中央のみならず地方でも迅速に進められていった背景となるわけです。この「中央」の動きと、それに呼応する「地方」の動向に関して出題されたのが設問Bになります。

強者の戦略

<白村江の戦いが律令国家の形成に与えた影響>

設問

B 白村江での敗戦は、日本古代の律令国家の形成にどのような影響をもたらしたのか、その後の東アジアの国際情勢にもふれながら、5行以内で述べなさい。

設問Bでは、白村江での敗戦が律令国家の形成に与えた影響が問われています。ただし、条件として「その後の東アジアの国際情勢にもふれながら」とありますので、注意が必要です。それでは、資料文の分析に進みましょう。

- (1) 664年、対馬島・壱岐島・筑紫国等に防人と烽火^{とぶひ}を置き、筑紫に水城^{とうほん}を築いた。翌年、答怱^{とうほん}春初^{しゅんしよ}を派遣して長門国に城を築き、憶礼福留^{おくらいふくる}・四比福夫^{しひふくふ}を筑紫国に派遣して大野城^{おの}と基肆城^{きい}とを築かせた。

まず、資料文(1)は、教科書にも記述のある白村江の敗戦後に国内の防衛体制が整えられていった事情（烽火、水城、朝鮮式山城の設置など）を述べています。そして、ここで登場する「答怱春初」^{とうほんしゅんしよ}「憶礼福留」^{おくらいふくる}は後でみる資料文(3)で「百濟貴族」と記載されていることから、**国内の防衛体制を充実させるために百濟貴族、つまり百濟から亡命してきたであろう百濟貴族が登用され、その知識が利用されていた**ということが読み取れますね。

次に資料文(2)に進みましょう。

- (2) 高句麗が滅んだ668年、新羅からの使者に託して、中臣鎌足は新羅の高官金與信^{きんゆしん}に船1隻を贈り、天智天皇も新羅王に船1隻を贈った。唐に向けては、翌年高句麗制圧を祝う遣唐使を送ったが、その後30年ほど遣使は途絶えた。

資料文(2)では「高句麗が滅んだ668年」以降の記述があります。そう、これが設問の条件ともなっている「その後の東アジアの国際情勢にもふれながら」の部分にあたるわけですね。ちなみに、唐・新羅の圧力によって高句麗が滅亡した後、**朝鮮半島を新羅が統一すると、今度は朝鮮半島の支配権をめぐる唐と新羅に対立関係が生じた**ことは基礎知識として大丈夫ですよ。その上で、この資料文(2)はどのように読むべきでしょうか。

まず、新羅に対してくり返し「船1隻を贈り」というフレーズが出てきますが、これは何を意味しているのでしょうか？これはあくまで憶測に過ぎませんが、おそらくはこの船は軍事使用を目的としたものであり、日本が新羅を支援しようとしている姿勢のあらわれではないでしょうか。一方で、唐に対しては「高句麗制圧を祝う遣唐使」以来、30年ほど交流が途絶していることから、**日本が唐・新羅の対立という東アジアの国際情勢の中で、新羅を支援することで強大な唐の圧力を回避しようとしている**姿が浮かび上がってきます。また、このように新羅と友好的な関係（資料文(4)にある「博麻が新羅使に送られて帰国できた」というところからも、日本と新羅の友好的な関係の一端がうかがえます）を築くことにより、間接的に取り入れられた唐の文物や制度が律令国家の形成に大きな役割を果たしたことは、2003年の東大の第1問（日本と唐・新羅の関係をたて前と実際に分け、考察する問題）でも問われている内容ですので、合わせて考えても良いかもしれません。

次に資料文(3)に進みましょう。

- (3) 671年、倭の朝廷は、百濟貴族の余自信^{よじしん}・沙宅紹明^{さくじょうみょう}・憶礼福留・答怱春初ら50余人に倭の冠位を与えて、登用した。

ここでは671年、つまり天智天皇治世中に、百濟

強者の戦略

の貴族が倭の冠位を与えられ、登用されたことが述べられています。もちろん、天智朝、さらにそれに続く天武・持統朝の時代は積極的に中央集権体制が整備されていった時代であり、それら**百済貴族の知識が日本の律令国家形成に大きな役割を果たした**であろうことを読み取ることができます。

さて、ここまでも解答を作成することができそうですね。例えば、

日本は白村江の敗戦後、百済からの亡命貴族を登用することで国内の防衛体制を整えるとともに、中央集権を標榜する律令国家の建設を進めた。また高句麗滅亡後の朝鮮半島支配をめぐる唐と新羅の対立という国際情勢の中で、新羅と友好的な関係を維持しながら唐の圧力に対抗しつつ、一方で大陸の文物や制度の取り入れを図った。(150字)

というようにまとめることはできます。しかし、もちろんこれでは不十分ですし、減点される可能性が多分にあります。何度も言っていますが、**東大の問題において意味のない問題文・資料文はひとつもありません**。まだ、資料文(5)が残っています。

(5) 『日本霊異記』によれば、備後国三谷郡司の先祖は、百済救援の戦いに赴いて無事に帰国したのち、連れ帰った百済人僧侶の力を借りて、出征前の誓いどおり、郷里に立派な寺院を建立したという。この寺院は、発掘調査された寺町廃寺である。伊予国の郡司の先祖についても、同様の話が伝わる。

ここでは、百済救援の戦いに赴いた備後国の旧国造の豪族が、連れ帰った百済人の僧侶の力を借りて寺院を建立したことが述べられています(伊予国でも同様の話があるとされています)。この資料文を単に「百済の人々から仏教を伝えられた」と解釈するべきではないでしょう。

ここで重要なのは概念的な仏教が伝わったところではなく、「寺院を建立」したという技術的な部分ではないでしょうか。つまり、寺院建築のためには様々な技術(瓦葺や礎石の技術、また広い意味では仏像彫刻の技術や、また經典の整理・管理の技術など)が必要になります。よって、「**寺院の建立**」という**行為は大陸文化の受容の象徴的なもの**といえます。

そして、この行為が「出征前の誓いどおり」なされたというところから、**地方の豪族が独自に行ったものである**ということが読み取れます。

では、このような地方の豪族による独自の大陸文化の受容は日本古代の律令国家の形成にどのような影響を与えたと考えられるのでしょうか。その答えとしては、「**中央**」で**推し進められた中央集権を標榜する律令国家の形成は「中央」だけでは成立しえず、実際に地方行政を担う地方豪族(郡司)の存在が前提となるものである**ということ、逆に言えば「**地方**」の豪族が**独自に大陸文化を受容することで、律令国家の基礎が形成され、「中央」の律令国家の形成に貢献した**ということがいえるわけです。

とにかく私たちは歴史において「中央」の動向に注視するあまり「地方」の役割に関しては目が行き届かないことがあります(歴史だけではなく現代の政治情勢も?)。当たり前のことですが、「地方」は「中央」に属するだけの存在ではなく、「中央」政治を形成する重要な要素であるわけです。この問題では、教科書ではなかなか表現しえない、そのような「**中央**」と「**地方**」の**関係性**に言及してゆくことが求められているのかもしれません。以上をまとめて解答を作成してみます。

強者の戦略

【設問B 解答例】

日本は白村江の敗戦後の対外危機に対応するため、百済の亡命貴族を登用し国内の防衛体制を整えるとともに、高句麗滅亡後の朝鮮半島支配を巡る唐と新羅の対立を利用しながら、中央集権を標榜する律令国家の建設を進めた。一方、地方においては豪族が独自に大陸文化の受容を行い、律令国家を支える基盤が地方でも形成された。(150字)

いかがでしたか？古代史はもちろんのこと、「中央」と「地方」の関係性といった、なんだか普遍的な問題を考えさせてくれる問題でした。やっぱり、東大の問題っておもしろいですね。

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか？」「これではだめなのか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！

<参考文献>

佐藤信『日本の古代』（放送大学、2005）

井上光貞『飛鳥の朝廷』（講談社、2004）